

尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について (三)

関口正之

二 主題 (承前)

美術研究三一七号、三一九号に載せた同題の報告の続編である。ここでは、釈迦八相図八幅のうちの第六幅から第八幅までの主題について述べる。

(六) 第六幅

画面下半中央の、樹下の岩に坐る人物を目がけて、上空から攻撃する数多くの力士や武将を描く本図は、仏伝の中の降魔の場面を描いたものであることは明白である。美術研究三一七号の本論(一)に述べたように、本図の表具は、題を記した部分が傷んでいるので八幅の中の順位あるいは題名を知ることができない。しかし、他の七幅に記された順位と画面の主題とから類推すると、本図(本誌三一七号図版一)は「第六」と書かれていた一幅に相当するものであろう。

本図は、中央に太子に襲いかかる魔王の軍勢を描き、太子の前には虚空から落ちて苦悶する二力士と竜が描かれる。太子を攻撃する魔軍の他に表されたものは、画面左下隅に三人の着飾った女性、その右に武将形

の三人の人物、中央下辺に腰を曲げて歩く二人の老人、その右に水瓶を持つ人物、その右下に太子に向けて合掌する人物が上半身だけ描かれる。更に、画面右側中央には、降魔の光景から離れて樹の下に坐る赤衣の如来の姿が見られる(三一七号図版VII b、本号図版IV)。

降魔の主題は、魔王の娘達が登場するところから急な展開を見せ始める。父の魔王のために太子の決意を乱そうとする娘達の数は、『仏説普曜経』が四人とする他は、経典の大半が三人と記している(資料一九a)。この娘達は太子の心を翻すことができず、太子によって「老母」の姿に変えさせられてしまうことが諸経に記される。老人の姿は、降魔の説話の中では魔王の娘の場合にのみ現れるものであるから、本図の下辺中央に描かれた老人二人は、太子によって老人の姿にさせられた魔王の娘であると考えることができる。老人に対して、画面の左下に立つ三人の若い女性は、美しさを自負して太子に挑戦するときの姿を表現したものである。言うことになる。ところが、若い女性は三人描かれているが、太子の顔を去る老人は明らかに一人少なく二人しか見えない。しかし、画面のこの部分の他には魔王の娘の説話を表現した部分は見出し出せないのである

から、老人を二人しか描かなかったことは、作者が經典の記述を必ずしも忠実に絵画化しようとする姿勢を持っていなかったことを示すものと考えることができよう。

三人の娘を派遣しても太子の決心を変えさせられなかったことを知った魔王は、魔衆を総動員して一斉に太子を攻撃させた。その軍勢は「一億八千」（『仏説太子瑞応本起經』）とも「十八億」（『修行本起經』・『仏説普曜經』）とも記される。魔衆の姿は、經典には竜とか虎などの猛獣であったり虫頭人身の怪物であるなど、空想しうる限りの恐ろしいものや不気味なものとして記述されているのであるが、本図の魔衆は、赤鬼や青鬼のように肉身の色による様々な変化は見せるものの、ほとんど全員が邪鬼に似た羅刹形に表現されている。画面の左側中程に、魔衆の一群の背後から全軍を指揮するかのような姿勢をとる着衣の一人が魔王である。魔王の左右には軍旗を捧げる二人が控えていることも魔王が居る本営を表したものと考えてよいであろう。魔衆は周囲に火焰を長く吐きながら岩や武器を太子に投げつけているが、武器の先は花に変化して曲ってしまっている。この光景は、諸經に「担山吐火」と記されたこと（『修行本起經』・『仏説太子瑞応本起經』・『仏説普曜經』）を絵画化していることが明らかである。『仏所行讚』や『過去現在因果經』が「化成五色花」、「成五色華」として単に武器が花に変わったことを述べるにとどまるのに対し、『方広大莊嚴經』のみは「或有発者停住空中。於其鏃上皆生蓮花」と記述しており、本図の描写はこれに近い表現であることがわかる。

諸經の中には、魔軍の攻撃に先立ち、魔王が一人で太子に問いかける様子を記すものがある（『過去現在因果經』・『仏本行集經』・『仏本行經』）。こ

のとき魔王は太子に向って矢を射たことが『過去現在因果經』と『仏本行經』に見える。とくに『過去現在因果經』だけは、その矢が空中に停まり、鏃は下に向いて蓮花に変わったことを述べている（資料一九a-6）ので、空中で武器の先が蓮花に変わる光景に関して本図は、『過去現在因果經』と『方広大莊嚴經』の記述と関連が強いことが知られる。

画面の下辺右側に、太子に向い礼をする二人の人物が、少し間隔をあけて描かれる。太子に近い一人は、宝瓶を持つ両手を前に伸ばし、宝瓶を捧げるように体を深く折り、右端の人物は、太子を見上げて合掌する姿が上半身だけ横から描かれる。右端の人物の表現は、地中から湧き出した瞬間を描こうとしたものと解釈することができるとするなら、ここは『過去現在因果經』以下の諸經に見える、地神の出現を表現したものと考えられる。魔王が太子の善根を問うたのに対し、それを証明するために地神が姿を現したことが諸經に記されている（資料一九c）。これらの中で、地神が半身を現したと明記したものは『仏本行集經』のみであり、合掌していると記すものは『仏説衆許摩訶帝經』しかない。そして、『過去現在因果經』、『仏本行集經』、『方広大莊嚴經』の三經には、地神は「七宝瓶」を捧げると記し、特に後の二經では「曲躬恭敬」しているとして述べている。本図に描かれた二人の人物を諸經の記述と比較すると、二者はいずれも地神の姿を表現したものであると考えることができ。諸經には地神が一尊だけ出現したか否かは明記していないが、地神を二尊描いたとしても不自然ではないであろう。『仏本行集經』では、魔衆が退散した後別に別に地神が現れ、一瓶の涼冷の水を魔王の上から注いだことを述べている。本図において宝瓶を捧げる人物が、魔王に冷水

を注いだ地神を表したと解釈することは無理であるが、「爾時彼処別有地神」(資料一九c-7)という記述は、複数の地神を表現することにためらいを感じさせないだけの、解釈の幅の広さを許すものであろう。従って、本図の画面右下辺の二人は、いずれも地神を描いたものと考えてよいであろう。

本図の右側中程には、四本の樹が集る下の台座に坐る人物が、降魔の光景から離れて描かれる。台座は、本図中央に描かれた降魔のときの岩座とは異り、六角形の台座である。周囲には何も描かれず、太子だけが台座の上に坐る姿は、魔衆に打勝って正覚を得て後に自分が悟った真理を一切衆生に説く決意を固めるまで七日間、思惟を重ねたことを表現したものと考えられる。この台座を『仏本行集経』と『衆許摩訶帝経』には「金剛座」と表現している。

これまでに述べた主題の他に、本図には、魔王の三女と二老人との間に神将風の姿をした三人が表されている。これらの服装は一群の魔衆とは異っており、三人の視線や身振りは魔衆に向けられているように受けとれる。降魔の説話を記述している諸経のうち『過去現在因果経』の中のみ、「護法天人諸竜鬼等」が太子を悩ます魔衆に対して怒りを抱いたと記している(資料一九d)。本図の神将形の三人も、魔衆の行為を怒った護法天人等の存在を表現する意図をもって描いたと解釈することができるであろう。

本図の各部分は、これまでに概観したとおり降魔に関する説話を比較的丁寧に絵画化している。とくに画面右側に、降魔の後に無上の真理を大悟した太子の姿を描き加えているから、本図は降魔と成道を主題にし

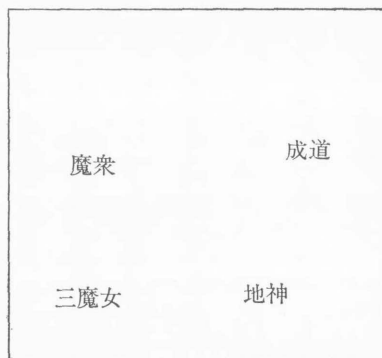
た一幅であると考えることができよう。

(七) 第七幅

「第七」と書かれた一幅は、画面をすやり霞によって上下二段に分け、上段には仏陀となった釈迦が多数の諸菩薩・天・弟子に囲まれて多数の人々に説法をしている有様を、下段には輦車を索いて来た象を車から解き放って休憩する人々を描いている(三一七号図版VII a)。

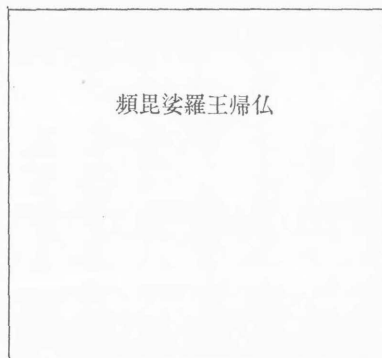
上段は、画面の上端に背景の遠山として鷲の頭の形をした山を中央に描いているので、この山々はマガダ国の首都王舎城の東北にある靈鷲山である。靈鷲山は覚者となった太子が「法華経」などを説いたと伝える場所として著名であるので、釈迦説法図の背景には必ずといってよいほど描かれる。釈尊の左右には八尊の菩薩と四天王と十人の声聞が左右相称に別れて立ち、上空には二尊の飛天が舞う。釈尊の前には、中央に背中を見せて坐る人物の左右に各十三人ずつ、計二十七人が釈尊を見上げて坐る。釈尊と諸菩薩等と二十七人の人々との間には十五個の輪宝が描かれる。ここに輪宝を描くことは珍らしいが、「転法輪」即ち釈尊の説法を象徴させたものと考えられるので、この部分は典型的な釈迦説法図であると言えよう(図版V)。

画面下半は、乗せて来た主人を降して馬や象を頸木から外して休ませ、従者や馭者達も車や象の近くにくつろぐ光景を画面の幅一杯に描く。右には滝の落ちる谷川と岩山、左には急流を渡る橋と岩を描いて、山の奥深く進んできたことを示している。象に索かれた輦車など三輛は、持光寺本の第一幅、第二幅に描かれた車の表現と同様の形式と莊嚴を施された車として表現されているので、国王や大臣百官を乗せて来た



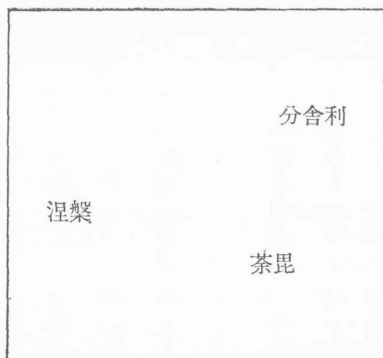
第六幅

ものを表したと考えられる。本図において車を扱う人物は、釈尊の前に坐る人達以外には見当たらないので、画面下半は、説法を聞きに釈尊の居る所へ行った人々の存在を説明する表現であるといえる。



第七幅

国王以下大勢の人々が、釈尊の話聞くために集まる説話は、仏伝の中ではマガダ国の頻毘娑羅王の場合が著名である。この説話を記す諸経(資料二〇)は、いずれも、国王達が車や輿を降り、威儀を取り去り、歩いて釈尊の所まで進んで皆悉く坐ったと記述している。本図の画面下半を全部使って、釈尊の説法を聞きに出かけた主人達の帰りを待つ従者達と思われる人々を描いたことは、国王達が釈尊に対し敬意を表して車や輿を降りたことを強調したものである。言い換えれば、釈尊の前に坐る聴衆の中には、画面下半に描かれた立派な車に乗れる、地位の高い人々がいることを暗示させるように表現



第八幅

を工夫していることがうかがえる。従って、本図は単なる釈迦説法図ではなく、釈尊に帰依する頻毘娑羅王と大臣百官諸人を描いた一幅であると考えてよいであろう。

画面上半に描かれた、釈尊の前に居並ぶ聴衆は、乗物を身近に描いておらず、各人がそれぞれ単身で、しかも徒歩で釈尊の前に集ってきたという諸経の記述どりに表現されている。聴衆の中心に居て釈尊と正面から向い合う後姿の人物は、坐る位置から考えて頻毘娑羅王であると推測される。他の人々よりも少し大きく描かれており、冠も他の人々より立派なものが頭に載っている。作者にはこの人物を際立たせて表現しようとする意図があったことは確かであろう。降魔成道の次の釈迦八相図の主題は、MOA美術館(旧称熱海美術館)本では「初転法輪」であるが、常楽寺本には本図と同様に「頻毘娑羅王帰仏」が描かれている。

(八) 第八幅

「第八」と書かれた一幅は、画面左側を上辺から下辺までを使って表現された一場面、画面下部右側、上部右端の三ヶ所に一群の人々が描かれる。各個所とも湧き上る雲により囲まれており、各々独立した場面を描こうとしていることがわかる。

画面左側は、中央の八本の樹に囲まれた台の上には横に臥す釈尊、その周囲と下辺には歎き悲しむ諸菩薩、諸天、動物を配しており、定型化された釈迦涅槃図が表現されている。画面上端には満月を置き、虚空を雲に乗って釈尊のもとに向う摩耶夫人一行をも形通り描く。

釈尊の涅槃の様子を記した『仏所行讚』・『仏本行経』・『仏般泥洹経』・『大般涅槃経』等は、いずれも娑羅双樹の下に臥した釈尊の姿を

述べているのみであり、画面に描かれたそれ以外の表現の中で、娑羅双樹が東西南北の各方に二本ずつあること、その樹が白鶴のように白く変わってしまったこと、仏弟子の阿難が気絶して死者のようになったことは、『大般涅槃経後分』にしか記されていない(資料二)。また、画面の中で釈尊の足もとで台の上に身を乗り出す老人を描いている。この老人を描かない涅槃図もあるが、大半の作例では描き加えている。この老人の存在は、『般泥洹経』、『大般涅槃経』にしか記されておらず、それらによると釈尊の入滅を悲しんだ老女が、釈尊の足の上に涙を落したときの様子を表現したものであろうと推定できる。ただし、この様子は、この二経においても涅槃の光景を述べた部分には存在せず、涅槃の次に記される、釈尊の荼毘の様子を述べる個所によって推定ができるものである。このように、涅槃図における各部分の主題は、經典の文章によって比定することはできる。ところが、日本に数多く現存する仏涅槃図は、その大多数が登場人物や情景描写などの道具立て、さらには画面構成などにおいて一定の形式を踏襲して描かれているのに反し、經典の記述は画面構成を規定できるほど明確な表現をした文章ではない。このことは、通例の涅槃図の形式は、經典の記述よりも、視覚的に表現された絵画作品が祖本となったことを示唆するものであろう。岡山・遍明院には涅槃から分舍利に至る説話を一幅の画面に描いた「釈迦八相図」がある。これは涅槃に関する説話だけを絵画化した作例であるので、涅槃曼荼羅か、むしろ涅槃変相と名づけるべき作品であるが、この作品においては、涅槃の部分に天から降りて来る摩耶夫人の一行を描いていない。涅槃に関連する様々な場面を描く涅槃変相にあっては、涅槃の場面を簡

尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について(三)

略に表現しても、この説話を絵画化する上で支障はない。それにもかかわらず本図は、涅槃の部分省略して表現せずに涅槃図をそのまま移したように描いており、涅槃の部分に関しては、經典の記述よりも涅槃図作品を手本としていることが、その点からも推察しうる。

画面右下は、材木を数十本ずつ交互に積んで組上げた高樓の上に大型の箱があり、箱の前に一人の僧が合掌して坐る。箱の上面は輿の屋根に似ており、四隅から幡が風に翻える。僧の顔の前にある箱の面から足が二本、箱の中から現れるように描かれているので、この箱が釈尊を納めた金棺であり、この僧は釈尊の高弟である大迦葉を表したものであることがわかる。諸経は、香木を棊のように高く積んだ上に安置された棺が、大迦葉が到着するまでは燃え始めなかったことを記している。師の涅槃を知り、遅れて馳せ参じた大迦葉が、釈尊の姿が既に金棺に納められた後であり、会えないことを悲しむと、釈尊は棺の中から両足だけを現して見せたことが記されている(資料三)。このとき大迦葉は、釈尊の足に涙の跡が残っていることを見つけ、涅槃のときの老女の話や阿難から知らされたことが述べられている。本図の棺が輿の屋根に似た箱に納められているように描かれているが、『仏本行経』には棺を「宝輦」に乗せたと記している。厳しく荘厳した様子を宝輦形の屋根と幡によって表現したものと考えられよう。大迦葉が釈尊の足を礼拝供養し終ると、足が棺に納まり、自然に荼毘の火が燃え上ったと記される。これとよく似た場面が、岡山・遍明院蔵釈迦八相図にも描かれているので、本図のこの場面は、釈尊と大迦葉との悲痛な別れを描いて、荼毘の光景を代表させたものであろう(図版VI)。

茶毘の場面と右上の場面をつなぐかのようになり、高樓の上辺から虚空に昇る棺らしきものを描き、傍にはそれに天蓋をさしかける人物を一人添える。茶毘を記述する諸経には、拘尸那城の力士達が棺をかついで城内を進み、人々が悲しみながら供養をしたことが述べられているが、『大般涅槃経後分』にだけは、金棺がひとりで虚空にのぼり、西の城門から城内に入り、四方の城門を通過して再びもとの場所に戻ったことが記されている。通明院本には、この場面が表現されているので、涅槃変相図の中の図様としては、『大般涅槃経後分』の記述を絵画化することが一般化していたのではないかと推測できる。

画面右上で湧き上る雲に囲まれた部分には、台の上の蓮花座に据えられた大きな瓶を多数の人々が取り囲む光景が表される。瓶の傍には匙状のものを持つ人物が立ち、その背後には僧形の人物が七人ほど描かれる。左側には天部形、右下には羅刹形が表される。諸経には、茶毘のあとで仏舍利を金瓶に納めて拘尸那城に安置したが、近隣の諸国が舍利を分けることを要求して戦乱が起りそうな情勢になったことが見える。このとき一人の婆羅門が仲裁に立ち、舍利を等分に分けて、その事態を収拾した。その人物の名を『仏所行讚』は「独楼那」、『大般涅槃経』は「徒盧那」であるとす。『仏般泥洹経』では「天帝」（帝釈天）が梵志に化身して自ら「屯屈」と名乗ったことを記している（資料二三）。『仏本行経』は「貴姓梵志」でその名が「香草性」であるとしている。これら諸経の婆羅門は『長阿含経』に記される「香姓婆羅門」のことを指していると考えられるので、本図において大瓶の前に匙形の道具を持つ人物は、香姓婆羅門を描いたものと推定できる。涅槃図の表現に関係が深い

と思われる『大般涅槃経後分』には、仏舍利が分けられたとは記さず、諸王は「礼舍利悲恋而還」とあり、香姓婆羅門も登場しない。しかし、本経には「捷疾羅刹」二鬼が、帝釈天が天に持ち還る仏舍利（齒）の一部を盗んだことが説かれている。羅刹を追った韋駄天が仏舍利を取り戻したという説が後に行われる。本図のこの場面の右下に、動きのある姿勢をした羅刹が五体、瓶をうかがう様子に描き添えられていることは、仏舍利盗難の説話の存在を作者が念頭に置いて描いたことを示すものであろう。従って、この場面は、仏伝の最後に説かれる分舎利の説話を香姓婆羅門と舍利瓶を中心に表現したものと考えられる（図版Ⅶ）。

以上のことから、第八幅は、仏伝として最後の涅槃の様子を中心として茶毘と分舎利の場面を描き添えたものであるから、釈迦八相としては「涅槃」の主題を表現したものと見なしてよいであろう。（未完）

〔資料〕 — 三 — (本誌319号31頁下段につづく)

持光寺藏釈迦八相図八幅の中に描かれた個々の主題について記述している章句を、大正新修大藏経に納められた諸経の中から選び、主題ごとに列記する。各主題は和数字で示し、經典名は、經典名を列挙した次の表の上に付けた洋数字によって表す。資料が「大正大藏経第3巻493頁中段」に納められているときは、その項の末尾に「3-493中」と記した。經典の中の現在使われていない文字については、その一部を当用漢字で代用した。

- 1 後漢・竺大力共康孟詳訳『修行本起経』二巻
- 2 呉・支謙訳『仏説太子瑞応本起経』二巻
- 3 西晋・竺法護訳『仏説普曜経』八巻
- 4 西晋・聶道真訳『異出菩薩本起経』一巻

5 北涼・曇無讖訳『仏所行讚』五卷

6 劉宋・求那跋陀羅訳『過去現在因果経』四卷

7 隋・闍那崛多訳『仏本行集経』六十卷

8 唐・地婆訶羅訳『方广大莊嚴経』十二卷

9 宋・法賢訳『仏説衆許摩訶帝経』十三卷

10 宋・釈宝雲訳『仏本行経』七卷

11 唐・義浄訳『説一切有部毘奈耶破僧事』二十四卷

12 元魏・慧覺等訳『賢愚経』十三卷

13 西晋・白法祖訳『仏般泥洹経』二卷

14 不載訳人付東晋録『般泥洹経』二卷

15 東晋・釈法顕訳『大般涅槃経』三卷

16 唐・若那跋陀羅訳『大般涅槃経後分』二卷

一九 降魔

a 三魔女

1 卷下・出家品第五「於是三女。嚴莊天服。從五百玉女。到菩薩所。彈琴歌頌。……。菩薩一言。便成老母。頭白齒落。眼冥背偻。拄杖相扶而還。」(3—470下~471上)

2 卷上「三女皆被羅縠之衣。服天名香瓔珞珠宝。極為妖治巧媚之辭。欲乱其意。……。菩薩答曰。……。其三玉女。化成老母。不能自復。」(3—472中下)

3 卷第六・降魔品第十八「爾時波旬告其四女。……。女聞魔言即詣仏樹。住菩薩前。綺言作姿三十有二。一日張眼弄睛。……。其魔王女化成老母。不能自復即還魔所。」(3—519上中下)

5 卷第三・破魔品第十三「魔王即放箭 兼進三玉女」(4—25下)

6 卷第三「魔有三女。形容儀貌。極為端正。妖治巧媚。善能惑人。……。魔王即便挽弓放箭。并進天女。菩薩爾時。眼不視箭。箭停空中。其鏃下向。變成蓮花。……。時三天女。變成老嫗。頭白面皺。齒落垂涎。肉消骨立。腹大如鼓。拄杖羸步。不能自復。」(3—639下~640中)

7 卷第二十八・魔怖菩薩品第三十一・中「爾時魔王波旬女等。善解女人幻惑之法。更加情態。益顯嬌姿。莊嚴其身。亦現美妙音辭巧便。來媚菩薩。而有偈説。……。爾時波旬諸魔女等。力既不能幻惑菩薩。心生愧恥。各自羞慙。相与曲躬。礼菩薩足。因遶三匝。辭退而行。安庠還行魔波旬辺。」(3—782下~783下)

8 卷第九・降魔品第二十一「於是魔女詣菩薩樹。在菩薩前。綺言妖姿三十二種媚惑菩薩。……。其諸魔女媚惑菩薩既不能得。……。右邊三匝作礼而去。」(3—592中~593上)

9 卷六「即化三女端正莊嚴。來於仏前。窈窕逶迤詐為瞻仰而欲魔魅。仏以神力變成老母。髮白面皺陋惡羸羸。以鏡照之慚蔽而退。」(3—950中)

10 卷第三・降魔品第十六「於是魔三女 便行詣道樹 …… 形体衰老悴 如花被重霜」(4—76中)

b 魔衆

1 卷下・出家品第五「更召鬼神王。合得十八億。皆從天來下。因繞菩薩。三十六由旬。皆變成師子熊羆兕象竜牛馬犬豕猴猿之形。不可称言。虫頭人軀蛇蛇之身龜龜之首。而有六目。或一頸而多頭。齒牙爪距。担山吐火。雷電四繞。獲持戟鉞。……。超躍哮吼滿空中 …… 矢刀火攻如風雨 ……」(3—471上)

2 卷上「魔王益忿。更召諸鬼神。合得一億八千万衆。皆使變為師子熊羆虎兕象竜牛馬犬豕猴猿之形。不可称言。虫頭人軀。虺蛇之身。龜龜之首。而六目。或一頸而多頭。齒牙爪距。担山吐火。雷電四繞。獲持戈矛。」(3—477中)

3 卷第六・降魔品第十八「爾時四部十八億衆。各各變為師子熊羆虎兕象竜牛馬犬豕猴猿之形不可称言。虫頭人軀。虺蛇之身。龜龜之首。一面六目。或一項而多頭。齒牙爪距担山吐火。雷電四繞獲戈矛戟。」(3—521上中)

5 卷第三・破魔品第十三「当更合軍衆 以力强逼迫 …… 不能令傾動 隨事還自傷 …… 飛矛戟利稍 凝虛而不下 雷震雨大雹 化成五色花」(4—25下~26上)

6 卷第三「其諸軍衆。忽然來至。充滿虚空形貌各異。或執戟操劍。……。四大海水。一時涌沸。護法天人。諸竜鬼等。悉忿魔衆。……。令抱石者。不能勝舉。其勝舉者。不能得下。飛刀舞劍。停於空中。電雷雨火。成五色華。」(3—

640—中下)

7 卷第二十九・菩薩降魔品第三十二上「是時魔軍夜叉衆等。以諸形貌種種身
體。」(3—790下)

8 卷第九・降魔品第二十一「是時夜叉大將統率自部夜叉羅刹毘舍遮鬼鳩槃茶
等。變化其形作種種像。……或有發者停住空中。於其鏃上皆生蓮花。火勢猛
熾化為五色拘物頭花。」(3—583下~594中)

9 卷第六「即時統領三十六俱胝鬼魅兵將。身披鎧甲手執槍劍及弓弩網索種種器
仗復集毒龍猛獸象馬水牛虛狼野干等。奔聚同行。又於空中現雲雷電閃霹靂風
電。四面一時逼惱侵害。」(3—950中)

10 卷第三・降魔品第十六「魔王梵意念兵衆 大呼徹天尽魔界 …… 皆放所執
戰鬪具 山樹金剛和雨雹」(4—77上中)

c 地神

6 卷第三「于時大地。六種震動。於是地神。持七宝瓶。滿中蓮花。從地踊出。」
(3—640中)

7 卷第二十九・菩薩降魔品第三十二上「是時此地所負地神。以諸珍寶。而自在
技。所謂上妙天冠耳璫手鐸臂釧及指環等。種種瓔珞莊嚴於身。復以種種香華。
滿盛七宝瓶內。兩手持持。去菩薩坐。不近不遠。從於地下。忽然湧出。示現半
身。曲躬恭敬向於菩薩。」(3—791上)

7 卷第三十・菩薩降魔品第三十二下「爾時彼處別有地神。將於一瓶涼冷之水。
灑魔王之上。」(3—791中)

8 卷第九・降魔品第二十一「爾時地神形体微妙。以種種真珠瓔珞莊嚴其身。於
菩薩前從地踊出。曲躬恭敬捧七宝瓶。盛滿香花以用供養。」(3—594下)

9 卷第六「爾時世尊於金剛座上。……作無畏印觸地面上告言。為我證明。時
地天神從地湧出。合掌唱言。」(3—950中)

10 卷第三・降魔品第十六「於是地神出現形 大音声我証我証」(4—87中)

d 護法天人

6 卷第三「護法天人。諸龍鬼等。悉忿魔衆。瞋恚增盛。毛孔血流。淨居天衆。
見此惡魔惱乱菩薩。以慈悲心。而感傷之。於是來下。側塞虛空。」(3—640下)

二〇 頻毘娑羅王婦仏

3 卷第八・仏至摩竭国品第二十六「有大社樹名曰遮越。仏与比丘共坐樹下。王
遙見仏与比丘衆。……王心踊躍下車步進。去五威儀。除蓋扇冠幘刀仗。前稽
首仏足。……王曰蒙祐。退坐一面。群臣百官稽首還坐一面。前者作礼。中者
低頭。後者叉手。皆却坐訖。」(3—532下)

5 卷第四・瓶沙王諸弟子品第十六「世尊既至已 止住於杖林 瓶沙王聞之 与
大眷屬俱 拳国士女從 往詣世尊所 …… 除去諸俗容 下車而步進」(4—
32上)

6 卷第四「往詣仏所。至杖林外。王即下輿。除却儀飾。步至仏前。……於是
頻毘娑羅王。却坐一面。時婆羅門。及以大臣。諸人民衆。皆悉就座。」(3—650
中下)

7 卷第四十四・布施竹園品第四十六「爾時摩伽陀国。頻頭娑羅。即遣嚴駕賢善
好車。而坐其上。共於国内諸婆羅門長者居士。前後圍遶。足滿十二那由他人。
從王舍城。導引而出。往詣仏所。……」(3—857中)

8 卷第十二・轉法輪品第二十六之二「王乘宝車。大臣百官前後導從。千乘万騎
出城迎仏。……王心歡喜下車步進。去五威儀稽首礼仏。」(3—612下)

9 卷第十「時王部從及諸眷屬。所乘之車有一万二千。復有國中婆羅門長者及諸
人民。亦有百千車。同出城門詣世尊所。……」(3—963上)

10 卷第四・度宝称品第十八「始從城中出 執轉輪聖王 出遊之威儀 与諸神宝
臣 前後俱導從 …… 象馬車人從 …… 王不勝歡喜 便下其宝車 ……
罷王五威儀 步進詣仏所 五体礼仏足 尽心謙恭敬 叉手仰視仏 甚妙意無厭
喜敬心無量 身衣毛皆豎 礼竟就位坐」(4—80下)

二一 涅槃

5 卷第五・涅槃品第二十五「告勅阿難陀 於彼双樹間 掃灑令清淨 安置於繩
床 吾今中夜時 当入於涅槃 阿難聞仏教 氣塞而心悲 行泣而奉教 布置訖
還白 如來就繩床 北首右脇臥 枕手累双足 猶如師子王 畢苦後辺身 一臥
永不起 弟子衆圍遶 哀歎世眼滅 風止林流靜 鳥獸寂無声 樹木汁淚流 華
葉非時零」(4—46中)

10 卷第七・大減品第二十九「時仏与大衆 遊至双樹林 梵音告阿難 詣双樹數

床 仏便在繩床 右脇而倚臥 面向於西方 首北而累足」(4-106中)

10 同「江河皆逆流 仏樹側双林 憂感花零落 江河水皆熱 猶如沸釜湯 双樹 為之萎 屈覆世尊身」(4-109上)

13 卷下「仏告阿難。施牀使北首。我背大痛欲臥。阿難即施牀著枕。仏偃右脇 臥。屈膝累脚。」(1-168下)

14 卷下「彼時仏勸賢者阿難。汝於蘇連双樹間。施繩牀令北首。我夜半当減度。 受教即施。還白已具。仏到双樹。就繩牀側右脇而臥。」(1-184下)

15 卷下「爾時世尊告阿難言。我今欲進鳩尸那城力士生地照連河側娑羅双樹間。 ……。語阿難言。汝可往至娑羅林中。見有双樹。孤在一処灑掃其下。使令清 淨。安処繩床。令頭北首。我今身体極苦疲極。…。爾時世尊。与諸比丘。入 娑羅林。至双樹下。右脇著床。累足而臥。如師子眠。端心正念。爾時双樹忽然 生花。墮如來上。」(1-199上)

16 卷上・応尽還源品第二「爾時世尊。…。於七宝床右脇而臥。頭枕北方足指 南方。面向西方後背東方。其七宝床微妙瓔珞以為莊嚴。娑羅樹林四双八隻。西 方一双在如來前。東方一双在如來後。北方一双在仏之首。南方一双在仏之足。 爾時世尊。娑羅林下寢臥宝床。於其中夜入第四禪寂然無声。大覺世尊入涅槃 已。其娑羅林東西二双合為一樹。南北二双合為一樹。垂覆宝床蓋於如來。其 樹即時慘然變白猶如白鶴。枝葉花果皮幹悉皆爆裂墮落。漸漸枯悴摧折無余。… …。爾時阿難。…。悶絕覺地猶如死人。」(12-905上中)

二二 茶毘

5 卷第五・歎涅槃品第二十七「弁金銀宝輿 香花具莊嚴 安置如來身 …… 積牛頭栴檀 及諸名香木 置仏身於上 灌以衆香油 以火烧其下 三燒而不然 …… 迦葉眷屬至 …… 敬礼於双足 然後火乃燃 …… 盛骨以金瓶」

(4-52上中)

10 卷第七・嘆無為品第三十「象牙之輦輿 諸力士與仏 擎置宝輦上 …… 上 於甘樹下 以種種香木 積為大薪積 …… 三燒仏薪積 火終不肯燃 …… 時迦葉速至 礼敬仏積已 於是仏薪積 即時自然燃 …… 金瓶盛舍利」(4

尾道市持光寺所藏釈迦八相図について(11)

— 111 中下 —

13 卷下「以栴檀香薪栴香薪栴薪。高広三十丈。…。火為不燃。…。迦 葉熟視仏黄金棺。意自念曰。吾来晚矣。不及吾師。不知世尊頭足所在。仏即応 声。双出両足。迦葉即以頭面著仏足。…。逝心理家。放火蛇維。」(12-173 下~174中)

14 卷下「見大迦葉。…。欲面礼仏故。使火不然耳。…。(迦葉)謂阿難言。 及未闍維。請見仏身。阿難对曰。仏身已纏。淹用麻油。藏在金棺。外積衆香。 匝淹沢膏。雖未闍維。固已難見。迦葉請至三。阿難答如初。以為仏身難復得 見。於是仏尸從重棺裏双出両足。一切見者莫不歡喜。迦葉稽首作礼見仏足上。 而有異色。仰問阿難。仏身金色。是何故異。阿難答言。有羸老母。稽首仏足。 墮淚其上。故異色耳。大迦葉又不悅。」(1-189中下)

15 卷下「而以宝棺置香積上。…。是時迦葉。…。見如來棺。在香積上。悲泣 流淚圍繞七匝。而登香積。至宝棺所。在於足処号咷嗚咽。頭面作礼。爾時如來 於宝棺内。而出双足。…。爾時迦葉見仏足上而有点汗。…。爾時有一貧窮 優婆夷。年一百歲。見諸婆羅門。及以利利長者居士。力士妻女。長幼大小。以 妙香華種種供養。自傷貧乏無以表心。作此念已。倍增悲慟。臨仏足上。心大懊 惱。涕泣流連。汗如來足。爾時迦葉既聞此語。心懷惆悵。怪責阿難曾不呵止致 此点汗。」(1-206下~207上)

16 卷下・機感茶毘品第三「爾時世尊大聖金棺。於娑羅林虚空中。徐徐乘空從拘 尸城西門而入。…。徐徐乘空從拘尸城東門而出。乘空右繞入城南門。漸漸空 行從北門出。乘空左繞還從拘尸西門而入。如是展轉遶三匝已。…。爾時一切 大衆所集微妙香木積高須弥。…。相重密次成大香樓。…。幢蓋幡花瓔珞雜 綵。遍空如雲以為莊嚴。…。是時大衆。…。共举如來大聖宝棺。置於莊嚴妙 香樓上。」(12-907中~908上)

16 同「世尊大悲即現二足千輻輪相。出於棺外廻示迦葉。從千輻輪放千光明。… …。爾時迦葉与諸弟子。見仏足已。」(12-909中)

二二 分舍利

5 卷第五・分舍利品第二十八「時七国諸王 …… 請求仏舍利 …… 七王大

111

怨怒 興軍如雲雨 來詣鳩夷城 …… 有一婆羅門 名曰独樓那 …… 即開
仏舍利 等分為八分 自供養一分 七分付梵志 七王得舍利 …… 得分舍利
瓶」(4-52中-54上)

10 卷第七・八王分舍利品第三十一「有貴姓梵志 厥名香草性 …… 即時以金
鬘 分聖尊舍利 別以為八分 安諦一平等 於是諸力士 從中取一分 致其余
七分 送与七国王」(4-113上-114下)

13 卷下「辺境八国。聞仏滅度。舍利在鳩夷國中。皆發兵來。索舍利分。……。

八王答曰。吾等叉手。索舍利分。了不与我必当以命抵取之耳。天帝見八王共
諍。欲得舍利還国供養。化為梵志。自名屯屈。…… 共請屯屈作平八分。屯屈
自以天上金鬘。中以石蜜塗裏成量舍利。各与一鬘。諸王得之。」(1-175上)

14 卷下「至終其夜。仏積燒尽。…… 共檢仏骨。盛滿黄金鬘。…… 乃共使毛
毳分之。…… 於時八国得仏八分舍利。各還起塔。」(1-190上中下)

15 卷下「諸力士衆。即以金鬘收取舍利。置宝輿上。…… 爾時韋提希子阿闍世
王。…… 即便遣信。語力士言。…… 汝今云何。独收舍利。…… 汝便可以
一分与我。…… 不見許者。與兵伐汝。余七国王及毘耶離。諸離車等。遣使之
法。皆亦如是。…… 各敵四兵而往攻伐。時諸力士。亦敵戰具。以擬來敵。鳩
尸那城中。有一婆羅門。名徒盧那。…… 諸力士皆悉与汝舍利之分。可取宝
瓶。為汝分之。八王歡喜。奉授金瓶。彼婆羅門。受諸金瓶。持以還帰。於高樓
上而分舍利。以与八王。」(1-207上中下)

16 卷下・聖軀廓潤品第四「爾時帝釈。持七宝瓶及供養具至荼毘所。其火一時自
然滅尽。帝釈即開如来宝棺欲請仏牙。…… 於仏口中右畔上領取牙舍利。即還
天上起塔供養。爾時有二捷疾羅刹。隱身随積。衆皆不見。盜取一隻仏牙舍利。
爾時城内一切士女一切大衆。即一時來欲爭舍利。…… 乃各執持矛稍弓箭刀劍
縑索一切戰具。各自莊嚴欲取舍利。…… 其城内人先已遣匠。造八金壇八師子
座。…… 爾時如来本生眷属。迦毘羅国王諸刹種等。…… 爾時摩迦陀主阿闍
世王。…… 爾時毘離外道名王。…… 安置七宝舍利金壇。…… 王語衆言。
…… 請衆与我一分舍利還国供養。衆言。汝何來晚。…… 王及臣衆不果所
請。…… 即礼舍利悲恋而還。」(12-910上-912上)

図版要項

一 岩橋教章筆 鴨図(原色刷) 三重県立美術館蔵

紙・水彩 縦五四・〇cm 横三五・三cm
三輪英夫「岩橋教章筆 鴨図」参照

二 国沢新九郎筆 西洋婦人像 東京芸術大学蔵

布・油彩 縦四九・〇cm 横三九・五cm

三 同 坂本龍馬像 高知 個人蔵

布・油彩 縦五〇・五cm 横四〇・三cm
二・三 三輪英夫「国沢新九郎の画歴と作品」参照

四 积迦八相図 第六幅 部分 広島 持光寺蔵

絹本着色 縦一一三・二cm 横一一九・六cm

五 同 第七幅 部分 同

絹本着色 縦一一四・二cm 横一一九・八cm

六・七 同 第八幅 部分(荼毘)(分舍利) 同

絹本着色 縦一一五・二cm 横一一〇・一cm

四一七 関口正之「尾道市持光寺所蔵积迦八相図について」(二)参照

八・九 観音菩薩立像 武蔵国分寺跡附近出土

銅造 総高三〇・〇cm 像高一八・三cm
八・九 久野健「武蔵国分寺跡附近出土観音菩薩立像」参照